

自然会話を素材とする教材の意義と NCRB (Natural Conversation Resource Bank) データベース

宇佐美まゆみ (国立国語研究所)

木林理恵 (日本学生支援機構)

磯野英治 (名古屋商科大学)

本パネルでは、NCRB (Natural Conversation Resource Bank) という「自然会話コーパス」データベースと「自然会話を素材とする WEB 教材の作成支援システム」の機能を併せ持つ「共同構築型」多機能会話データベースの開発趣旨とその活用法について、主に日本語教育の観点から論じる。NCRB は、様々な場面における事前のシナリオのない自発的な会話を録音・録画し、それらをリソースバンクとして蓄積し、データベース化したものである。自然会話分析研究用のデータベースとしても利用できるが、もう一つの大きな特徴は、「自然会話を素材とする WEB 教材」の「作成支援機能」も備えているプラットフォームになっている点である。

宇佐美 (2015)^{注1}のパネルでは、主に、NCRB へのデータの登録方法や、自然会話素材のどのような部分が教材となりうるのか、また、それらを教材化する際にどのような観点から考える必要があるのかなどについて論じたが、本パネルでは、NCRB のうち、主に、会話データ登録後の「教材作成支援機能」の使い方の部分を中心に紹介するとともに、実際に NCRB を使って作成した「自然会話を素材とする教材」の作成方法を紹介し、教材試作版を紹介しながら、その活用法について論じる。

パネルの構成は、まず、研究代表者が、自然会話教材作成支援機能を中心に、NCRB 開発の趣旨と活用方法など、全般的な内容をまとめる。次に、第二発表者が、NCRB の実際の操作方法、及び、「自然会話教材作成支援システム」を利用して教材を作成する方法を、デモンストレーションを交えながら紹介する。最後に、第三発表者が、自然会話教材の試作版を紹介するとともに、自然会話教材作成のためのデータ収集の方法や、教材作成のポイント、及び、日本語教育現場での活用法について論じる。最後に、自然会話を素材とする教材が「日本語のコミュニケーション能力養成」全体の中でどのように位置づけられるのかや、「自然会話を素材とする WEB 教材」や「共同構築型データベース」の意義について、フロアも交えて活発な意見交換を行いたい。

注1：パネルセッション「NCRB (Natural Conversation Resource Bank) データベースと日本語教育」(登壇者：宇佐美まゆみ・木林理恵・品川寛) Castel/J 国際会議、ハワイ大学カピオラニ・カレッジ、2015 年 8 月 7 日。

付記：本研究は、国立国語研究所日本語教育研究領域共同研究プロジェクト (H28.4)「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」の一環として行っているものである。

また、本研究の前身にあたる研究の一部は、『自然会話リソースバンク構築による世界的教材共有ネットワーク実現のための総合的研究』平成 23-26 年度科学研究費補助金基盤研究 (A) (研究代表者：宇佐美まゆみ) (課題番号 23242027) の助成を得ている。記して感謝したい。

NCRB 開発の趣旨と活用方法

— 自然会話教材作成支援機能を中心として —

宇佐美まゆみ

1. NCRB 開発の背景と趣旨

NCRB (Natural Conversation Resource Bank) とは、「BTSJ (Basic Transcription System for Japanese)^{注1}」による文字化資料」と音声・動画付きの「BTSJ コーパス」を「データベース化」し、さらには、そこに、自然会話の動画と文字化資料に基づく WEB 教材である「自然会話教材作成支援システム」を搭載した共同構築型多機能データベースである。大きくは、「自然会話コーパスのデータベース機能」と、「自然会話教材作成支援機能」を持つもので、自然会話分析研究の研究資源であるとともに、「自然会話を素材とする教材」のリソースバンクという、「研究」と「教育」双方に活用できるプラットフォームである。

NCRB 開発の背景には、研究面では、コーパスの語用論的研究へのニーズ、教育面では、自然なコミュニケーション能力の養成へのニーズがあった。

コミュニケーションの語用論的研究のためには、いわゆる「コーパス言語学」で扱われているような大量の「テキスト」を編んだものだけではなく、比較的少量でも、話者の関係や話題等々の諸条件を統制して収集された「会話 (音声・動画)」とともに、同時発話、割り込み、沈黙等の語用論的分析に必要な情報が付与された「トランスクリプト (文字化資料)」が収録されたコーパスが必須である。近年、様々な目的に基づくコーパスの構築が増えてきているが、語用論的分析には適さないコーパスがほとんどであるのが現状である。日本語教育に関係の深い、いわゆる「学習者コーパス」も、未だ語彙や文法項目の習得研究を主目的とするものが多いため、文字化の原則は、比較的簡素で、語用論的研究に必要なオーバーラップ等の情報が付与されていないものが多い。一方、会話分析 (Conversation Analysis: CA) で使われている文字化の原則は、語用論的分析にも適用可能な詳細な情報が付与されているものの、比較的少数の会話の定性的な分析には適しているが、より数の多い会話データの定量的分析には適さない形になっている。そのため、定性的分析だけではなく、定量的分析も可能にし、研究者間で共有するためのコーパスの構築には適さないと言える。

このような状況を鑑み、研究面では、語用論的アプローチを含む「総合的会話分析」(宇佐美 2008) の方法論や、人間同士の相互作用を、定量的・定性的双方から分析するのに適する「文字化の原則」として「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」(改訂版最新版は、宇佐美 2015) を開発し、BTSJ 文字化資料と音声 (一部) 付きコーパスである『BTSJ による日本語話し言葉コーパス (トランスクリプト・音声) 2011 年版』(宇佐美監修 2011) を構築した (以降 BTSJ コーパス)。また、その後、BTSJ システムセットを開発して、自動集計機能等を搭載し、コーパスの語用論的分析の時間と労力を格段に短縮した。

一方、日本語教育の背景を考えると、「自然なコミュニケーション能力の習得や養成」へのニーズが高いにもかかわらず、「自然会話の特徴を生かした教材」というものがほとんどないという現状がある。つまり、本当の意味で、オーセンティックな、生の教材は、ほとんどないと言っても過言ではない。その一因に、そもそも「自然なコミュニケーション」とは何なのかということさえ、明確になっているとは言い難い現状がある。筆者は、自然会話分析研究を行ううち、自然会話データは、研究のみならず、コミュニケーション教育のための教材 (materials) にも成り得ると確信した (宇佐美 2007ab ; 2012 等)。しかし、「自然会話を素材とする教材」の作成には、文字化に時間がか

かる上に、さらに「教材としての解説」等も加えていかなければならない。それらに要する膨大な時間を考えると、「自然会話教材作成支援システム」のようなものを開発して、教材作成の一部を自動化し、教材作成の時間と労力を削減することが有効であると考えに至った。

NCRB (<http://ncrb.ninjal.ac.jp/>) は、上記のような必要性とアイデアを踏まえて構築された、新しいタイプの「共同構築型多機能データベース」であり、また、「共同構築型 WEB 教材リソースバンク」でもある。そのトップページを図 1 に記す。また、「教材作成支援機能」を用いて作成した教材のトップページを図 2 に示した。



図 1 NCRB トップページ



図 2 自然会話を素材とする教材
トップページ

2. NCRB の活用方法

本システムで作成した教材は、主には WEB 上での独習用を想定しているが、必要やレベルに応じて、日本語の授業中に、日本語会話の音調や間合いの例として、討論の材料などとして、多様に活用することができる。

この自然会話教材は、同じ素材を、初級から超級に至るまでのすべてのレベルの学習者が、各自のレベルや興味に応じて活用することを想定している。全くの初級学習者であっても、動画を見れば、何が起きているのかは、ある程度想像できるものである。非言語行動も含む文脈情報を基に、やり取りの内容を、想像、予測できる能力を養うことも、コミュニケーション能力の養成には不可欠のことである。よって、初級学習者にも、動画を見ることによって、「何か聞き取れた単語はあるか?」、「日本語の音の流れは、どんな感じか?」などを、媒介語を介してでも質問することなどによって、少数の聞き取れた単語と非言語行動も含む文脈情報から、その場面でどのようなやりとりが行われているかを推測する力を養う。また、日本語会話の音声的特徴を早い段階から掴んでもらう。さらには、授業で使う場合は、スピーチレベルのシフトなどの、場面や人間関係に応じたコミュニケーションの方法について考えさせたり議論させたりするなど、様々な活用法がある。また、特に海外の学習者には、ドラマなどとは違って、普通の日本人の普通の日本語の自然な会話に触れることによって、逆に、教材の中の一般の登場人物(学生など)や、言いよどみや言い直しなどもあるやりとりが、かえって身近に感じられ、そういう会話に参加してみたいというような学習動機を高めることもできるだろう。

3. 今後の課題

今後の課題としては、まず、現実的な問題として、本データベースをより広く一般に公開してい

くためには、サーバーの管理、運営方法やその原則などのルール作りをする必要があるということがある。また、「データ登録者」各自が、登録データの肖像権や著作権に適切に対処した上で NCRB にアップロードすることを徹底させる必要がある。データ登録者とデータ利用者の役割が一方的、固定的にならないように、なんらかのルールを設けていくとともに、より多くの人々がデータ登録への意欲を高めてくれるよう工夫する必要がある。

また、現在、NCRB の「自然会話教材作成支援システム」によって作成した教材は、試作版の段階であるが、なるべく早いうちに、登録希望者を募り、実際に教材を作成・使用してもらった上で、教材作成者、教材を利用した教師や学習者から、インターフェースの利便性や、より具体的な活用方法等をフィードバックしてもらえようような仕組み作りを進めたい。さらには、WEB 上での利用状況の把握や分析、クラス内での利用に関しては、学習者の反応や利用効果を何らかの形で検証していくというような「評価」も行っていく必要がある。そのためにも、NCRB の第一次公開後は、教材登録者、教材利用者とも、より多くの方々にいろいろな形で活用していただきたいと思っている。

注 1：「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」は最初に宇佐美 (1997) で発表され、2003 年に改訂された。その後、2006 年、2007 年、2011 年と改訂され、現在の最新版は、宇佐美 (2015) である。

【参考文献】

- 宇佐美まゆみ (1997) 「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) の開発について」『日本人の談話行動のスク립ト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作』平成 7-8 年度文部省科学研究費基盤研究 C(2) (課題番号: 07680312)(研究代表者: 西郡仁朗)、研究成果報告書、12-26.
- 宇佐美まゆみ (2007a) 「自然会話の教材化とディスコース・ポライトネス理論 1: 対人コミュニケーション論としてのディスコース・ポライトネス理論の考え方」『第一回ルーマニア日本語教師会 日本語教育・日本語学シンポジウム報告書』ルーマニア日本語教師会. Avrin Press. 12-25.
http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/gyouseki_pdf/ronbun/2007a.pdf
- 宇佐美まゆみ (2007b) 「自然会話の教材化とディスコース・ポライトネス理論 2: 教材としての自然会話の価値」『第一回ルーマニア日本語教師会 日本語教育・日本語学シンポジウム報告書』ルーマニア日本語教師会. Avrin Press. 26-38.
http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/gyouseki_pdf/ronbun/2007b.pdf
- 宇佐美まゆみ (2008) 「相互作用と学習ーディスコース・ポライトネス理論の観点から」西原鈴子・西郡仁朗編『講座社会言語科学第 4 巻教育・学習』、ひつじ書房、150-181.
- 宇佐美まゆみ監修 (2011) 「BTSJ による日本語話し言葉コーパス (トランスクリプト・音声) 2011 年版」『人間の相互作用研究のための多言語会話コーパスの構築とその語用論的分析方法の開発』平成 20-22 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 研究代表者: 宇佐美まゆみ (課題番号 20320072)
- 宇佐美まゆみ (2012) 「母語話者には意識できない日本語コミュニケーション」野田尚史編『日本語教育のためのコミュニケーション研究』、くろしお出版、63-82.
- 宇佐美まゆみ (2013) 「NCRB (Natural Conversation Resource Bank) の開発とその意義についてーこれからのコーパスのあり方とその研究・教育への活用法への一提案ー」『第 8 回日本語実用言語学国際会議 (ICPLJ8) Conference Handbook』国立国語研究所、128-131.
- 宇佐美まゆみ (2015a) 「BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット 2015 年改訂版」『自然会話リソースバンク構築による世界的教材共有ネットワーク実現のための総合的研究』平成 23-26 年度科学研究費補

助金基盤研究(A)(研究代表者：宇佐美まゆみ)(課題番号 23242027) 研究成果.

宇佐美まゆみ (2015b)「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2015 年度版」

宇佐美まゆみ(2015c)「NCRB 開発の趣旨と活用方法、今後の課題」、第 6 回「日本語教育とコンピュータ」国際会議(Castel/I) パネル「NCRB (Natural Conversation Resource Bank) データベースと日本語教育」(宇佐美まゆみ、木林理恵、品川 覚)、ハワイ大学カピオラニ・カレッジ、電子版予稿集、61-62.

共同構築型言語資源としての NCRB の操作方法と活用法

木林理恵

1. はじめに

本発表では、NCRB の具体的な操作方法 (データの登録や利用、及び、自然会話教材作成の方法) を紹介し、共同構築された言語資源をどのように活用していくかを論じる。

2. NCRB の利用環境、基本構成

まず、NCRB (<http://ncrb.ninjal.ac.jp/>) の利用環境は、現在、OS : Windows7, 8、ブラウザ : InternetExplorer9~11, Google Chrome で、登録可能なデータの形式は、mp4 (動画)、mp3 (音声) ファイルである。構成は、大きく、「自然会話データを使った研究」と「自然会話を素材とする教材」の 2 つに分かれている。それぞれ、「登録や作成」と「利用のみ」で入り口が分かれており、「自然会話を使った研究」については、「データを登録したい方はこちら」及び「データを利用したい方はこちら」、また、「自然会話を素材とする教材」については、「教材を作成したい方はこちら」及び「教材を利用したい方はこちら」から入るようになっており、全体として 4 つの入り口がある (発表 1 の図 1 参照)。会話の登録と教材の作成には、アクセス用の ID とパスワードが必要である。

3. 会話データの登録とコーパスとしての活用法

会話データ (音声・会話スクリプト、それらに関する情報) は、NCRB トップページより、「自然会話データを使った研究」の「データを登録したい方はこちら」から登録する。アクセス用の ID とパスワードを入力すると、ログイン画面が現れる (図 1)。作業の流れは、「音声・動画のアップロード」→「音声・動画情報の入力」→「話者情報の入力」→「会話情報の入力」→「会話スクリプトの入力」となる。各作業は「音声・動画」、「会話」、「会話グループ」という 3 つの画面で行い、上部のタブを切り替えることで画面を移動できる (図 2)。



図 1 ログイン画面



図 2 作業画面 (タブ切り替え)

音声や動画は、NCRB 上で長さを調整することもできる。具体的には、比較的長い音声や動画をアップロードしておき、その後、研究や会話教材に使用する部分だけを切り取って文字化することが可能である。つまり、データの切り出し範囲を指定する機能が付いている (図 3)。

「話者情報」や「会話情報」の情報欄には、例えば「話者情報」には、性別・年齢・社会的地位、「会話情報」には、会話の場面や話題等、研究や教材化に必要な情報を詳しく入力できるようになっている。話者の性別（男性／女性）や母語（日本語）のように、よく使う情報には、入力候補が出てくるようになっている（図4）。また、いったん入力した情報を呼び出す機能もあるので、それらを用いて簡便かつミスがないように必要事項を入力することができる。



図3 データの一部を切り出して使用することが可能

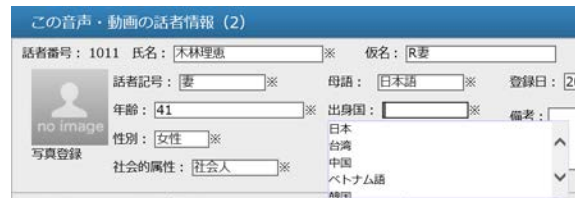


図4 「話者情報」の入力画面

文字化資料、つまり、会話スクリプトの作成は、NCRB上で動画や音声を聞きながら作業することもできるし（図5）、「BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット 2015年改訂版（以下、BTSJ システムセット）」（宇佐美 2015）を用いて文字化資料を整えた後、NCRBにアップロードすることもできる。また、会話スクリプト画面では動画や音声にタイムスタンプを押すことができ、文字化や分析の際に、動画や音声の頭出し再生がしやすいようになっている。



図5 会話スクリプト入力画面



図6 会話グループ画面

このようにして登録した1つ1つの会話は、「会話グループ作成機能」を用いてグループ化することができる（図6）。自分が登録したデータを1つのグループにまとめることもできるし、検索機能を用いて、「友人同士の雑談の会話」等、研究目的に応じた条件で検索し、該当する会話のみをグループ化して保存することもできる。このようにグループ化することは、同様の条件の複数の会話を、定量的に分析するときに便利である。

NCRBはBTSJシステムセットと連携している。NCRB上で決められた作業手順通りにデータ情報を入力すると、NCRB番号が自動的に付与される。このデータをダウンロードし、BTSJシステムセットを用いて文字化資料を整えることによって、通し番号の間違いや情報の入力漏れといった、データ整備の際に起きやすいケアレスミスを防ぐことができる。さらに、BTSJシステムセットでは、研究のためのコーディングや基本的記述統計の自動集計ができる。NCRBの検索機能を用いて自分の研究目的に合うデータを複数抽出し、一括ダウンロードしてBTSJシステムセットに読み込ませ、自動集計機能等を用いることによって、会話の定量的な分析を効率よく行うことが可能になる。研究で用いる場合は、文字化入力支援機能が多く自動集計もできる、BTSJシステムセットの

利用を推奨する。

なお、一連の作業は、「マイページ」で管理することが可能である。マイページはログイン名ごとに作成され、取込み済みの音声・動画や、文字化作業中の会話や文字化作業済みの会話、作成した会話グループなどが一覧表示される。つまり、教材の作成だけでなく、その途中の作業管理も NCRB 上でできるようになっている。

4. NCRB で自然会話教材を作成する手順

NCRB では、自然会話教材を、基本的に、動画は 1 シーンにつき 1 分程度の長さで、3 シーンで一つのユニットを構成するように作成することを推奨している。具体的な手順は、次の通りである。

まず、トップページの「自然会話データを使った教材」の「教材を作成したい方はこちら」にアクセスする。自然会話の素材は、既に NCRB に登録されている会話から選ぶことができる。自分で収集したデータを登録してから使用してもよいが、教材の目的に適した動画データを検索し、抽出することも可能である。例えば「レストランで注文する」等、様々な場面に応じた自然会話教材を各自が作成することができる。

自分で収集した会話データを使用するときは、まず、「データを登録したい方はこちら」にアクセスして、会話データを登録する必要がある。会話データ登録の際に、「会話スクリプト入力」画面（図 5）で発話にタイムスタンプを押す。（これによって、完成した自然会話教材画面では、文字と動画が連動し、会話スクリプトの中でその時に発話されている内容がハイライトされるようになる（図 7）。「会話スクリプト入力」画面での作業が終わったら、一旦、NCRB のトップページに戻り、NCRB のトップページから、「教材を作成したい方はこちら」に入り直して、教材作成画面に移動する。そして、「教材新規作成」から、自分が登録したデータを選ぶ。（図 8）。



図 7 動画と会話スクリプトの連動



図 8 教材作成用の画面（入口）

教材作成画面では、発話ごとに、Contents、Expressions（文法・機能・その他）、Strategies、Politeness、Culture という 5 つの観点から、該当する学習項目の解説を記入することができるようになっているので（図 9）、必要に応じて、解説を入力していく。さらに、理解を助けるための質問（選択式・記述式）とその解答、及びそれらの解説を入力していくことができる（図 10）。

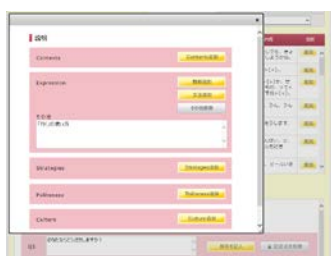


図 9 学習項目や解説の入力画面



図 10 Q&A の入力画面

質問と解答、それらの解説を入力する画面では、質問に関連するライン番号を入力する欄があるので（図 11）、当該会話のどの部分について注目すればよいかを示すことができる（図 12）。

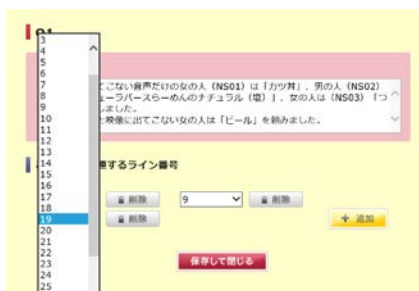


図 11 質問内容に関連するライン番号の入力



図 12 Q&A の解答・解説画面

この教材は、トランスクリプトの翻訳も提示できるようになっている。自然会話を素材とする日本語コミュニケーション教材は、実際に使うときは、対象レベルを限定せず、どのレベルの学習者にも、その興味やレベルに応じたことを学習してもらうようにすることを推奨している（宇佐美 2012）。トランスクリプトの翻訳を見ることで、初級学習者も会話の内容が理解でき、その興味やレベルに応じたことを自ら見つけ学ぶことが可能である。また、すべてが聞き取れなくても、非言語行動も含む文脈から、意味や意図を予測する力をつけることが重要であり、その点が、「自然会話を素材とする教材」の意義の一つであると言える。

5. 課題

技術的な面では、現在、NCRB が問題なく動作する利用環境は Windows のみ、ブラウザは Internet Explorer 9～11、及び、Google Chrome となっている。これを、iOS 等、その他の OS や様々なブラウザ、及び、タブレットやスマートフォンで使用したりできるよう、検討していきたい。

また、現在は、自然会話を素材とする教材を試作した段階であり、実際の使用はしていない。今後は、実際に教材として使用していくことによって、より使いやすくなるように改良する必要があるかもしれない。教材作成、及び、学習のための機能をよりよくするためにも、教師や学習者等、様々な利用者に活用していただけることを願う。

NCRB は共同構築型言語資源として設計されている。データの提供や利用という側面だけでなく、利用者からのフィードバックを受けることによって、システムの改良や、リソースバンクのよりよい運用方法を構築していくことが今後の課題である。

【参考文献】

宇佐美まゆみ (2012) 「母語話者には意識できない日本語コミュニケーション」 野田尚史編『日本語教育のためのコミュニケーション研究』、くろしお出版、63-82.

宇佐美まゆみ (2015) 「BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット 2015 年改訂版」『自然会話リソースバンク構築による世界的教材共有ネットワーク実現のための総合的研究』平成 23-26 年度科学研究費補助金基盤研究(A)(研究代表者：宇佐美まゆみ) (課題番号 23242027) 研究成果.

木林理恵 (2015) 「NCRB データベースと BTSJ 自然会話コーパスの活用法」、第 6 回「日本語教育とコンピュータ」国際会議 (Castel/J) パネル「NCRB (Natural Conversation Resource Bank) データベースと日本語教育」(宇佐美まゆみ、木

NCRB を利用した自然会話教材の作成方法とその活用法

磯野英治・木林理恵

1. はじめに

本パネルでは、自然会話を素材とする教材作成のための具体的なデータ収集方法、及び、収集時に注意すべき点を述べ、収集した自然会話データからどのような言語学習項目が指摘できるかを論じる。

2. 自然会話教材の作成のためのデータ収集方法

まず実際のデータ収集に必要な機材は、録音・録画のできるビデオカメラである。教材作成の観点からは、非言語行動の観察や実際の場面のイメージを作り出すためにも、動画での収集は必須である。撮影時には、屋外で音声拾いにくい状況も想定されるため、コードレスマイクなどを別途用意する必要もある。録音・録画機器の技術の向上と一般社会への普及により、データ収集とその後の編集は以前ほど困難ではなくなった。そのため武田・磯野(2006)や磯野(2007)で扱ったような「アナログデータの電子化」や「データ収集後の動画編集作業」については、少しずつその解説の必要がなくなってきたと言えるが、古くて貴重なデータを NCRB にアップロードして言語資源にしておく際には、重要になってくる。

データ収集に際しては撮影・編集技術のみならず、研究倫理を厳守することが必須である。言い換えれば、撮影の目的や用途を被撮影者に明確に伝え、同意(許諾)を得る必要があるということである。具体的には、撮影の目的や趣旨、研究や教材への活用、及び、同意書への記入の依頼についての説明を記したカバーレターと同意書を用意し、被撮影者に説明の上、同意書に署名してもらう。加えて、研究での活用におけるデータの質の保証の観点から「録画に対する意識」や「いつもと同じように話すことができたか」など、会話の自然さに関するフォローアップアンケートも必要に応じて取っておく必要がある(宇佐美 1999)。

3. 自然会話を素材とする日本語コミュニケーション教材の作成

NCRB では、基本的に、自然会話教材の動画を1シーンにつき1分程度の長さで作成する。そこでまず、収集したデータから、どの1分間に注目して教材とするかが問題となる。例えば、「依頼する」のようにタスク(場面や機能)がある会話は、そのタスクに関連する部分を切り取る。一方、雑談のように特にタスクがない会話は、話の内容が視聴者にもわかりやすい部分や、自然なコミュニケーションの特徴がよく出ている部分を切り取ることになる。

現在、NCRB 上では2つの教材試作版を作成したところである。一つは「レストランにて(シドニーの日本料理店)^{注1)}というユニットの「注文する」というシーン、もう一つは「夫婦の会話」というユニットの「観光旅行では行かない場所についての話」というシーンである。前者は「注文する」というタスクがある会話、後者は夫婦の雑談という、特にタスクがない会話である。「注文する」というシーンは、宇佐美(2012)においても、多くの重要な学習項目が出現することが取り上げられている。それらを反映させた試作教材を本発表で紹介する。

本稿では、「夫婦の会話」というユニットの「観光旅行では行かない場所についての話」というシーンを取り上げる(図1)。「注文する」という場面とは異なり、このシーンは、親しい関係の話者

による雑談である。また、教材の1シーンは1分間と短い。ここから、どのような言語学習項目を見つけることができるだろうか。



図1 自然会話を素材とする教材 完成画面

3.1. 会話の中で使用されている表現・文型

どのような場面にも、会話でよく用いられる表現や文型は、出現しているものである。このシーンで見られた表現を以下の表1に示す。

表1: 「観光旅行では行かない場所についての話」における表現・文型

発話内容	解説
あ、ごめん。	この会話では、妻がテーブルのコップを倒してしまったことを深刻にならない程度に夫に謝る表現として「あ、ごめん」が使用されています。謝罪表現にはカジュアルな場面では「ごめん」「ごめんなさい」、フォーマルな場面では、「すみません」「申し訳ありません」のように、場面や相手にかかる負担度などに応じた様々な表現があります。
ふーん、そうなの。	会話の相手から、なにか新しい情報を聞いて驚いたときなどに、「ふーん」を使用することがあります。ただ目上の人には、失礼になる場合もあるので、注意が必要です。
前、あの一、何だ、館山、南房総で、あの一、あのへんが、大河ドラマの、しょ、招致活動やった。	この会話の「あの一」は何かを指している訳ではなく、「考えている」ことを相手に伝えたり、相手に聞くことを準備させたりするという機能を持っています。他にこのような機能を持つ表現には、「えーと」があります。「あの一」は聞き手に対しての発話ですが、「えーと」は、自分が次に話すことを考えているときなどに使われます。また、聞き手がいなくても使用することができます。

3.2. 自然会話特有の現象

ここでは、自然会話のコミュニケーションにみられる学習項目となりうる現象として、話者交替(ターンの交替)に焦点を当てて説明する。以下の表2に、単独でターンとなるあいづちの「うん」の例を示す。

表 2：ターンを取るあいづちの「うん」

発話文番号	話者	発話内容
3	妻	どっちがいいですか、<どっちが>{<}</td>
4	夫	<サッカーで>{>}しか行かない。
5	妻	うん。
6	夫	もなか。
7	妻	はい。

発話文番号 5 は、あいづちの「うん」である。あいづちは、相手のターンのときに、聞き手が発話することの重要性が強調されるが、自然会話では、一つの発話文（宇佐美 2015）として捉えられることもあり、単独でターンになることも少なくない。

次に、相手の発話に構造的につなげて自分の発話を行った例、及び、相手の発話を繰り返しながらも「共同発話文」になっている例を示す。

表 3：相手の発話に構造的につながる発話と繰り返し

発話文番号	話者	発話内容
8	夫	サッカーでしかいない、行かない。
9	妻	たとえば。
10	夫	たとえば一、鹿島とか。

表 3 の発話文番号 9 で、妻は「たとえば」と、直前の相手の発話につながるようなかたちで発話を発している。会話ではこのように、相手の発話に構造的につなげて自分の発話を行う形でターンが交替するが、それが、結果として、「共同発話文」（宇佐美 2006、木林 2014）になっているというようなことがよく起こる。ここでは、相手の発話を促す機能になっているが、基本的に、相手の言いたいことを先取りして発することから、結果的に、相手の言いたいことを理解していることを示す機能になることが多い。さらには、そのことが、相手に対するポジティブ・ポライトネスとして機能することもある（宇佐美 2006）。

そして、発話文番号 10 で、夫は「たとえば一、鹿島とか」と、会話相手が直前に言った言葉を繰り返している。相手の発話を繰り返すことは、自分の発話を円滑に開始する戦略として機能している。

以下の表 4 に、「ああ」というフィラーの例と、笑いが起こったときの例を示す。

表 4：「ああ」というフィラーと笑い

発話文番号	話者	発話内容
11	妻	<鹿島だ>{<}</td>
12	夫	<でも鹿島じん>{>}、鹿島神宮に行く人もいるか。
13	妻	ああー、うん。
14	夫	あと、<笑いながら>塚原ト伝に興味を持っている人とか。
15	妻	<笑い>。
16	夫	<笑い>。

17	妻	売り出さないのかねー、鹿島ってそういうの。
----	---	-----------------------

表 4 の発話文番号 13 で、妻はターン交替時にまず「あー」という、相手の話を理解しているというフィラーで発話を開始し、その後に「うん」とつないでいる。聞き手としての反応を示しつつ、スムーズに自分のターンをとっている。

また、発話文番号 15 と 16 で、妻と夫は笑っているが、これは、一つの発話文として捉えることができ、単独のターンとみなしてよいところである。つまり、「笑い」が一つの発話文の代わりになることや、笑いによって、ターンを交替することも可能である。

このように、雑談の会話にも、自然なコミュニケーションのための学習項目は、さまざまな形である。本稿で取り上げたシーンの場合は、ターン交替という観点からの聞き手としての反応、及び、話し手としてスムーズに会話に参加するストラテジーなどを示すことができた。

3.3. 学習項目を NCRB 上で提示する方法

NCRB の教材作成画面では、発話ごとに、Contents、Expressions (文法・機能・その他)、Strategies、Politeness、Culture という 5 つの観点から、該当する学習項目の解説を記入することができる。このため、自然な会話に特徴的な現象を様々な観点から解説することが可能である (図 2)。



図 2 発話に対する解説



図 3 解説の別ウィンドウ表示

例えば、上記表 3 の相手の発話に構造的につながる発話の説明は、Expressions の機能、及び、Strategies の欄に解説を入れることが考えられる。完成した教材では、発話ごとの解説は、トランスクリプト右の「説明」というボタンを押すと、別ウィンドウで表示される (図 3)。NCRB の中の、自然会話を素材とする WEB 教材は、学習者がひとりで学習できるようにも設計されているが、教室での使用も可能である。解説欄に様々な観点から丁寧に解説を入力していくことは、学習者が自分の興味にそったことを自然会話の中に見つけ、自主的に日本語の自然なコミュニケーションを学ぶ助けになるだろう。

4. おわりに

以上のように、会話においては内容のやりとりだけではなく、あいづちやディスコースマーカーなど様々な要素を伴いながらターン交替がなされ、コミュニケーションが行われている。つまり話者は、ターンを交替し、会話を進める際、「命題内容」のみを述べるのではなく、様々な形式や談話装置を駆使して円滑なコミュニケーションを図ろうとしているのである (磯野 2010; 磯野・上仲

2014)。これらの教育については、これまでの日本語教育の現場においては、あまり実践されておらず、学習者の自然習得に委ねられてきた部分が多い。しかし、会話というものは、ターン交替の連続体であることを考えると、これらのストラテジーを体系的に教育に取り入れていくことも、今後は必要となるだろう（磯野・上仲2016）。本発表では、「自然会話を素材とする教材」を活用することによって、これらの会話のストラテジーを学習者に提示することが可能になり、教育に活用できることを示した。自然会話を素材とするWEB教材の作成支援システムによって、教師や学習者のニーズに応じた多様な教材が作成され、多くの人に利用されることを願っている。

注1：「レストランにて（シドニーの日本料理店）」の作成にあたっては、松本剛次氏に多くの協力をいただいた。記して感謝したい。

【参考文献】

- 磯野英治（2007）「自然会話教材開発研究における素材データの収集について」『魅力ある大学院教育イニシアティブ「多言語社会に貢献する言語教育学研究者養成プログラム」報告集3 自然会話教材開発研究部会』、東京外国語大学大学院地域文化研究科言語教育学プログラム推進室、宇佐美まゆみ編、275-279.
- 磯野英治（2010）「日本語母語話者のターン交替における語用論的特徴について—機能的分類による定量的分析と会話教育への示唆—」『日本学報』第84集、韓国日本学会、227-240.
- 磯野英治・上仲淳（2014）「日本語学習者の接触場面におけるターン交替時の発話の語用論的特徴」『大阪大学国際教育交流センター論集 多文化社会と留学生交流』第18号、大阪大学国際教育交流センター、31-39.
- 磯野英治・上仲淳（2016）「日本語母語話者がターン交替時に使用するディスコースマーカーターン交替時の発話を中心に—」『日本語研究』第36号、首都大学東京・東京都立大学 日本語・日本語教育研究会、87-95.
- 武田雅一・磯野英治（2006）「自然会話音声データの電子化について」『言語情報学研究報告13 自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』、東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」、宇佐美まゆみ編、309-312.
- 宇佐美まゆみ（1999）「談話の定量的分析 -言語社会心理学的アプローチ-」『日本語学』18(11)、明治書院: 40-56.
- 宇佐美まゆみ（2006）「話し手と聞き手の相互作用としての「共同発話文」の日英比較 -「共話」、「Co-construction」現象の再検討-」『高見澤孟先生古希記念論文集』、高見澤孟先生古希記念論文集編集委員会、103-130.
- 宇佐美まゆみ（2012）「母語話者には意識できない日本語コミュニケーション」野田尚史編『日本語教育のためのコミュニケーション研究』、くろしお出版、63-82.
- 宇佐美まゆみ（2015）「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）2015年度版」
- 木林理恵（2014）「協調的な言語行動としての共同発話文—会話データから日本語教育に示唆されること—」『2014年度日本語教育学会秋季大会予稿集』、81-86.